

【高齢者の生きがい】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

2 高齢者の生き方

(2) 高齢者の状況

第1 高齢者の人格

(1) 人格の定義

「人格」…一般的に、知的側面を含む広い意味でのその人らしさを示すものです。その人本来の特性だけでなく、性別や年齢、社会的地位などの役割期待にそった特徴が影響していると思われます。＝人格は一貫性をもっているが、固定的なものではなく、変化する可能性があることを示しています。

(2) 人格の発達的变化

人格には変わりやすい部分と変わりにくい部分とがあります。また、人格の基本的な部分は加齢のみでは変化しないと考えられています。

次にあげる三者は、それぞれの発達段階に発達課題があると考え、それを克服することにより、人格は発達すると考えられました。

・エリクソン(E r i k u s o n, E. H.)

人の発達を8段階に分ける。 老年期(第8段階)の発達課題…「統合」

エリク・H・エリクソンが提唱した発達課題の各段階とその心理的側面は、以下のとおり 左記が成功、右記が不成功した場合

Stage One	:乳児期 信頼	vs	不信
Stage Two	:幼児前期 自律性	vs	恥・疑惑
Stage Three	:幼児後期 積極性	vs	罪悪感
Stage Four	:児童期 勤勉性	vs	劣等感
Stage Five	:青年期 同一性	vs	同一性拡散
Stage Six	:初期成年期 親密感	vs	孤独感
Stage Seven	:成年期 生殖性	vs	自己吸収
Stage Eight	:成熟期 自我統合感	vs	嫌悪・絶望

エリクソンの場合、必ずしも成功のみが賞賛されているわけではなく、不成功もそれなりに経験する必要性もあるとされています。両者の統合したものが正常な成長に寄与します。また、前段階の発達課題は次段階の発達段階の基礎となるので、エリクソンの発達課題からなるライフサイクルはピラミッド型でよく表されます。

・ペック(Peck, R.)

老年期を3つの段階に分ける。

- ①引退の危機 — 自我の分化
- ②身体的健康の危機 — 身体の超越
- ③死の危機 — 自我の超越

・ハヴィガースト(Havighurst, R. J.)

人に発達を6段階に分ける。

老年期の課題

- ①体力や健康の衰えに適応すること
- ②引退と収入の減少に適応すること
- ③配偶者の死に適応すること
- ④同年代の人びとと親密な関係を結ぶこと
- ⑤社会的・市民的義務を果たすこと
- ⑥身体的に満足でききる生活環境を確立すること

(3) 人格の安定性

・コスタとマックレー(Costa, P. T. Jr & McCrae, R. R.)

多くの人格特徴の中から加齢の影響を受けにくく、安定していると考えられる次の3因子を見出しました。

- ①神経症性 不安, 敵意, うつ, 自己意識, 衝動性, 性を表す因子
- ②外向性 暖かさ, 集団性, 強引さ, 活動性, 興奮追求, 肯定的感情を表す因子
- ③経験への開放性 空想, 審美, 感情, 行為, 思考, 価値を表す因子
開放性とは、過去の経験や社会の因習にとらわれないという傾向

(4) 人格の変化に影響を及ぼす要因

- ①心身の機能の低下 高齢者になり、身体的機能が低下し、さらに精神的機能の低下にもつながること
- ②老性自覚 人が年をとったと感ずること
- ③環境の変化 定年退職や子どもの独立、高齢者施設に入所するといった変化すること

(5) 高齢者の人格特徴

・己中心性, 頑固

知的能力に低下が環境への適応力を低下させた結果生じること

- ・猜疑心，ひがみ
感覚器官，特に聴覚の機能の低下により生じやすくなること
- ・保守性，内向性
社会からの刺激が少なくなることによること
- ・慎重さ，用心深さ
生理的老化により反応速度が低下するということが、慎重さに見えているのかもしれないこと
- ・心気性
外界から自己の内面へと関心に移るにつれて、健康状態が気になり、少しの症状を病気と結びつける傾向が出てくるとされること

* 人格の変化を調べる方法

横断的方法…同時期の若齢者と高齢者を調査する方法

縦断的方法…同じ人を長期にわたって追及する方法

どちらを用いるかで、結果に大きな違いが出るといわれています。

(参考文献；『高齢者福祉総論』晃洋書房発行)